祖父母との同居経験が大学生の自己肯定意識に及ぼす影響

A73123　松本 美香

【背景】

自己肯定意識とは、簡単に言うと、あるがままの自分を受け入れることで自分を尊重することである。

今日において少子高齢化が進んでいる。高齢者の子どもとの同居率の推移をみると、約 20 年間ほぼ一貫して同居率は低下しており、三世代同居世帯の割合は減り続けている。子どものいる高齢者世帯のうち、15 年前は 8 割を占めていたものが現在は約 6 割にまで低下してきている。(平成 15 年版厚生労働白書)

核家族に伴って現代の子どもたちの多くは祖父母などの高齢者と接する機会が少ないなかで養育されている。このような状況は、子どもたちの人格形成に何らかの影響を与える可能性があると考えられる。(關戸, 2001)

【調査】

本研究では、祖父母が年をとっていく経過を身近でみることよって高齢者をいたわる気持ちや態度を身につけていくと言われていることから、祖父母との同居経験が大学生の自己肯定意識に影響を及ぼすのか検討することを目的として質問紙調査を行った。この研究を進めた上で、仮説は以下の通りである。

仮説 1　祖父母との同居経験の有る場合は、自己肯定意識が高い。

仮説 2　祖父母との同居経験の有る場合は、自己受容が強い。

仮説 3　祖父母との同居経験の有る場合は、親子関係も良好である。

【方法】

1．調査対象・期間

2010 年 11 月下旬～12 月上旬に 3 回に分けて、淑徳大学に在学中の大学生 395 名であった。

有効回答は 334 部(男性 106 名、女性 227 名、不明 1 名)、無効回答は 61 部であった(有効回答率 84.6%)。

2．質問紙の構成

自己肯定意識尺度(平石,1990)、孫ー祖父母関係評価尺度〔孫版〕(田畑ら,1996)、親子関係診断尺度 EICA(辻岡ら,1976)の尺度を使用した。幼児期・児童期・青年期の祖父母との同居経験の有無や同居形態、一日の平均コミュニケーション時間の項目の回答とフェイス項目の記入を求めた。

3．分析方法

相関分析、ｔ検定、重(単)回帰分析を行い、祖父母との同居経験が自己肯定意識に及ぼす影響を検討した。

【結果】

自己肯定意識尺度と孫 - 祖父母関係評価尺度と親子関係診断尺度 EICA と同居経験それぞれの下位尺度同士の相関を求めた。自己肯定意識尺度の下位尺度である充実感、自己閉鎖性・人間不信、自己表明・対人的積極性、被評価意識・対人緊張で相関分析を行った結果、自己受容と自己実現的態度は相関係数 r＝0.536(n=334,p<.0001)で有意な相関がみられた。孫 - 祖父母関係評価尺度の下位尺度である時間的展望促進機能と自己受容で相関分析を行った結果、相関係数 r＝0.223(n=334,p<.0001)で有意な相関がみられた。

表１　自己肯定意識と各下位尺度の相関分析結果　　*ｐ＜.05　**ｐ＜.01　***ｐ＜.001

		1	2	3	4	5
自己肯定意識	1. 自己受容					
	2.自己実現的態度	0.536***				
	3.充実感	0.521***	0.587***			
	4.自己閉鎖性・人間不信	-0.351***	-0.406***	-0.514***		
	5.自己表明・対人的積極性	0.473***	0.449***	0.398***	-0.368***	
	6.被評価意識・対人緊張	-0.321***	-0.304***	-0.456***	0.568***	-0.299***

表２　各時期 EICA と各下位尺度の相関分析結果　　*ｐ＜.05　**ｐ＜.01　***ｐ＜.001

		1	2	3	4	5	6
EICA	11.幼児期 EICA	0.123*	0.241***	0.177*	-0.208**	0.177**	0.024
	12.児童期 EICA	0.110	0.250***	0.186	-0.254***	0.200	-0.011
	13.青年期 EICA	0.141	0.267***	0.221***	-0.226***	0.245***	-0.031

自己肯定意識の高低に対して、孫－祖父母関係評価尺度の下位尺度の平均の差を調べるためにｔ検定を行ったところ、孫－祖父母関係評価尺度の下位尺度である時間的展望促進機能の高い人の方が幼児期・児童期・青年期 EICA が良好である（平均＝15.06,標準偏差 4.16）。よって、「時間的展望促進機能の高い人の方が幼児期・児童期・青年期の親子関係が良好な傾向がある」と考えられる。自己肯定意識の下位尺度である自己閉鎖性・人間不信の強い人の方が孫－祖父母関係評価尺度が低い（平均＝24.78,標準偏差 6.49）。自己閉鎖性・人間不信が有意な差が認められた。よって、「自己閉鎖性・人間不信の強い人の方が孫－祖父母関係評価尺度が低い傾向がある」と考えられる。

重回帰分析で有意であったものをそれぞれ単回帰分析した。独立変数を同居経験・孫－祖父母関係評価尺度の下位尺度とし、従属変数は自己肯定意識で重回帰分析を行ったところ、Ｆ値 8.11、決定係数 R^2=0.09(ｎ＝334、ｐ＜.0001)で、有意であった。よって、「祖父母との同居経験がある人は自己肯定意識が高い傾向にある」ことが考えられる。また、独立変数を孫－祖父母関係評価尺度の下位尺度とし、従属変数は親子関係診断尺度 EICA 幼児期で重回帰分析を行ったところ、Ｆ値 100.19、決定係数 R^2=0.37(ｎ＝334、ｐ＜.0001)で有意であった。よって、「祖父母との関係が良好である人は幼児期の親子関係も良好であった傾向が高い」と考えられる。

【考察】

祖父母との同居経験が大学生の自己肯定意識に及ぼす影響について調査を行った。本研究からは以下のことが明らかとなった。

孫－祖父母関係評価尺度の下位尺度である時間的展望促進機能の高い人の方が幼児期・児童期・青年期 EICA が良好である。よって、「時間的展望促進機能の高い人の方が幼児期・児童期・青年期の親子関係が良好な傾向がある」と考えられる。自己肯定意識の下位尺度である自己閉鎖性・人間不信の強い人の方が孫－祖父母関係評価尺度が低い。「自己閉鎖性・人間不信」が有意な差が認められた。よって、「自己閉鎖性・人間不信の強い人の方が孫－祖父母関係評価尺度が低い傾向がある」と考えられる。

独立変数を同居経験・孫－祖父母関係評価尺度の下位尺度とし、従属変数は自己肯定意識で重回帰分析を行ったところ、Ｆ値 8.11、決定係数 R^2=0.09(ｎ＝334、ｐ＜.0001)で、有意であった。よって、「祖父母との同居経験がある人は自己肯定意識が高い傾向にある」ことが考えられる。

（1）祖父母との同居経験がある人は自己肯定意識が高い傾向にあることが考えられる。

（2）あるがままの自分を受け入れることで自分を尊重することと、時間的展望を促進することは関係があると考えられる。

（3）祖父母との関係が良好である人は幼児期の親子関係も良好であった傾向が高いと考えられる。

【文献】

・平石　賢二　1990　自己肯定意識尺度
・田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤　1996　孫－祖父母関係評価尺度[孫版]
・辻岡　美延・山本　吉廣　1976　親子関係診断尺度　EICA
・關戸　啓子　2001　祖父母との人間関係が大学生の自己受容と対人態度に及ぼす影響
・村山　陽　2009　高齢者との交流が子どもに及ぼす影響